

明治期に造られた和製漢語のベトナム語化

ビン・シン (アルバータ大学)

VINH Sinh

はじめに

日本とベトナムとの交流といえば、たいへん漠然としたイメージしか浮かばないと思うが、実は、20世紀初頭、日本の明治末期―大正時代、ベトナムはフランス植民地下にあったが、両国の間は書物を通じて、静かで、ひそかな交流があったのだ。書物を通じてといっても言語の異なる両国がいかにして交流をはかり得たのだろうか。媒介したのは漢書である。

19世紀後半、西洋の衝撃にまともに対面し、東アジア諸国のなかで、いち早く近代化のさきがけをなしたのは、いうまでもなく日本であった。明治日本の知識人は、ヨーロッパの近代文明をとりいれようと、語学を学びながら欧米諸学術を日本語に翻訳、紹介に心がけた。これらの書物は、「東学」(日本を学ぶ)を唱えた中国の啓蒙家梁啓超(1873―1929年)をはじめとする日清戦争以降日本に留学、もしくは亡命していた中国改良派の人々によって中国語に再翻訳され、中国本土へと紹介された。

当時ベトナムと中国はともに西力東漸の怒濤に脅かされ、中国は清仏戦争によってベトナムの宗主権をフランスに譲ったものの、越中の文化関係は深く、綿々と、人、文物ともに絶え間ない往来がつづいていた。

ベトナム人と漢字のかかわりは古く、八百余年もの間(1075―1919年)、ベトナムは科挙制度を実施していた。この官吏登用の資格試験の受験者は、合格するためにはおびただしい量の漢文の知識が必須であった。その結果生れた漢文の読み書き自由なエリートたちは、西洋の近代科学や社会思想が日本語の著訳書から中国語に重訳、紹介された、いわゆる「新書」の読み手にもなった。漢文が読めることは、試験のために読む古典の類だけでなく、こうして、新しい西洋の思想やそれを表現しようとする和製漢語との出会いをも知らずにはたしたといえる。

ところが、1919年にベトナムで科挙制度がついに終わりを告げると、漢字や漢文、漢字から派生的に考案された文字であるチュノム(字喃 chu nom)はベトナムの学校で一般カリキュラムからはざされた。そこで、すでに一部の人に使われていたクォク・グウ(「国語」quoc-ngu、ベトナム語を表記の簡易なローマ字で表わしたアルファベット)が国字として採用されたのは当然といえば当然であるが、他方、教養としての漢文の存在理由は急速におとろえ、またたく間に漢籍は姿を消してしまった。

和製漢語のベトナム語への転用過程を調べてみると、第一段階は、明治期の翻訳、著述書から中国語の「新書」へ、第二段階は「新書」からベトナム語のクォク・グウへ、いわば「中継文化交流」である。第一段階についてはすでに研究されているので、要点を述べることにとどめ、第二段階に焦点をあてて、人文科学、社会科学、及び科学技術にわたって、現代ベトナム語に借用

された和製漢語を紹介したい。最後に、遅ればせながら、ドイモイ（刷新）政策で近代化を計ろうとする現在のベトナムを、漢字文化圏という観点からみてみたいと思う。

和製漢語が中国語に借用されるまでの経緯

日清戦争後、康有為や梁啓超のような改良派の中国知識人は明治維新を経た日本を例にして、中国の政治を根本的に改革し、民間商工業を興し、富国強兵を図ろうとした。ところが、戊戌変法運動が失敗に終わったため、梁啓超は日本に渡り、横浜で『清議報』と『新民叢報』を発行し、「論学日本文之益」や「東籍月旦」などの論文で〈東学〉、すなわち今日でいう日本研究、の必要性を説いた。明治維新を遂げた日本に対する清朝末中国の関心度の高さは、留学生の数や日本書物翻訳ブームを通じてうかがうことができる。清朝政府は1896年から日本へ官費留学生派遣を開始したが、日露戦争直後、1905-06年頃には私費留学生も増加して、在日中国人留学生の数がなんと8600余名に達したという。ちなみに、当時在米中国人留学生は僅か130名程度だったといわれている。

日本が中国の学生にとってもっとも望まれる留学さきである理由については、当時、清朝の高官の地位にあった張之洞が著した『勸学篇』に裏付けられている。

- 〔i〕 路近くして費をはぶき、多くつかわすべし。
- 〔ii〕 華を去ることちかくして、考察しやすし。
- 〔iii〕 東文（日本文）は中文（中国文）にちかくして、通曉しやすし。
- 〔iv〕 西学は甚だ繁、およそ西学の切要ならざるものは、東人すでに刪節して、これを酌改す。中（中国）、東（日本）の情勢、風俗相ちかく、彷徨しやすし。事半ばにして、功倍すること、これにすぐるものなし。〕¹⁾

日露戦争直後に中国人留学生の数が空前に達したのは、他に直接の原因もあった。ひとつは1905年に中国で科挙制度が廃止され、出世の登龍門は新教育にとってかわられ、海外留学が特に評価されるようになったことである。いまひとつは日本がロシアに勝ったことである。アジアの一国である日本がヨーロッパの強国ロシアを負かしたことは、中国人をはじめ、西洋列強によって植民地化された他のアジア人にとって、大きな希望として受けとめられたのである。少なくとも日本が朝鮮を植民地とし、中国大陸で本格的な干渉政策をとるまで、日本はこの勝利によって、まさしく〈アジアの勇気〉であった。

日本に留学していた中国人学生のなかに、魯迅、陳独秀、郁達夫、周恩来、田漢、郭沫若などのほかに、のちに母国の文化や政治の変革にかかわった人物も多くいた。日本に取り入れられた西洋近代の制度、文物を導入し、中国を近代化させるために、「改革派」の知識人や留学生たちは日本の書籍を大量に翻訳した。翻訳書は政治、経済、法律、教育、文学、芸術、農業、科学技術など、幅広い範囲にわたり、それこそ「マルクスとエンゲルスの『共産主義宣言』から川口章吾著の『口琴吹奏法』まで」という範囲の広さであった。²⁾

日本書の翻訳ブームは1902-1907年にピークに達し、年間平均50冊が訳出され、約2007冊が出た1903年は最高記録であった。最初に中国人留学生が来日した1896年から1937年までに、単行本だけでも2600冊が出版されたという。³⁾

日本書の翻訳は中国に新知識を伝えただけでなく、漢字の教養深い明治の知識人が欧米のこと

ばや概念を表わすために生み出した新漢語が中国語に逆輸入され、それらのことばは、いまでは中国語の一部となっていることである。実藤恵秀氏の研究によると、中国人学者が、現在使われている中国語のなかに、和製漢語とみとめている語彙は1063語あり、これらの語彙は現代中国の論文に使われることばの30%強を占めている。⁴⁾ 現に、「中国の憲法や社会科学、自然科学の出版物は日本語から借用された語彙でうずめられている」という。⁵⁾

中国の「新書」のベトナムに入った経路とその影響及び、「新書」のベトナム語訳

ベトナム語でいう「新書」(tan-thu タントゥ)とは、日清戦後から五・四運動(1919年)までの25年間に中国人が書いた啓蒙的な著作をさすものであるが、時にはその期間がさらに阿片戦争までさかのぼることもある。なお、「新書」とは単行本のみならず、新聞、雑誌などに掲載された記事や論文も含んでいる。

1900年代初頭において、中国人で日本語に通じ、習得した近代の知識をいちばん精力的に、かつ幅広く中国に紹介、伝達したのは、なんといっても梁啓超であったろう。当時のベトナムにおいても、種々の「新書」が輸入されたとはいえ、やはり梁啓超の著作がいちばん多く紹介され、影響が大きかったようである。中国や日本から輸入された「新書」は、ベトナムの憂国の知識人たちの海外知識や情報を得る主要な源泉であり、彼らを「大いに啓発させ、啓蒙運動といった方向へむかわせた」。⁶⁾

この「新書」はいかなるルートでベトナムに入ってきたのだろうか。「新書」はベトナムの大きい町の中国商社で販売されていたようである。明治日本に倣ってベトナムの近代化を図ろうとする1910年代のズイタン(維新)運動の何人かの参加者にインタビューをした、現在ダナン市に住み、東遊運動の研究者であるグエン・バン・スアン(Nguyen-Van-Xuan)氏によれば、「そのころ、これらの書籍は大きな貨物船に他の荷物といっしょに載せられ、書籍商人は港から小舟でホェ(順化)市のフーバンラウ(富文楼)の河岸のようなところまで運んだ……。都であるホェ市にいた中国人にとってはかなりいい商売だったようだ。(少し南の)ホイアン(会安)市をふくむ他の町ではこの商売はそれほど発展していなかった」。⁷⁾

1907年のハノイ(河内)に発足されたドンキン・ギェットック(東京義塾)運動に参加したダン・グエン・カン(Dang-Nguyen-Can)氏の息子であるダン・タイ・マイ氏(Dang-Thai-Mai、生前はハノイ大学文学部教授)の回想記にも、「新書」はベトナムで広く普及したが、ベトナムにおける「新書」の輸入経路については、ベトナム現地の中国人の役割を強調している。「ハイフォン、ハノイ、サイゴン、ホェ市の中国人商店の仲介で日本で出版された梁啓超氏らの「新書」をかなり手に入れることができた。ベトナムの知識人たちはそれによって、アメリカ、ヨーロッパ、日本など、列強の政治、文化の状況を知る機会を得たといえる」。⁸⁾ この回想記はさらに、「フランス革命、ドイツやイタリアの統一、日本の明治維新などの歴史に触れた書は当時の進歩的なインテリの愛読書だった……。西洋思想、とりわけ18世紀のフランス哲学は、それまで儒教が〈天経地義〉と信じていた人々の視野を大きく広げた。みんな、中国語の訳本を通じて、モンテスキュー、ボルテール、ルソーの著作に感動していた。」と記している。⁹⁾

「新書」が20世紀初頭のベトナム知識層に及ぼした多大な影響を、当時の代表的インテリであるファン・ボイ・チャウ(Phan-Boi-Chau 潘佩珠、1867-1940)とファン・チャウ・チン

(Phan-Chau-Trinh 潘周棹、1872—1926) を通じてみてみたい。

潘佩珠の自伝である『潘佩珠年表』のなかで、彼自身、1897年頃、ホエ市の友人から「梁啓超著の『中東戦記』、『普法戦記』、徐継余著の『瀛環誌略』を借り、これを読んで、列強競争の現状や国亡種滅について知るようになった」¹⁰⁾ と回想している。

潘周棹は、31歳で(1903年)ホエ市で行なう会試(科挙試験の第二次)に補欠で合格し、ホエ市の阮朝(1800—1945年)の官吏に任じられた。潘周棹はまもなく官職を離れたが、彼が最初に「新書」に出会ったのもその頃だった。潘周棹の親友で、1945年まで活発な言論活動をしていたフィン・トゥク・カン(Huynh-Thuc-Khang 黄叔抗、1876—1947)氏が書いた潘周棹伝記に、「あの頃、「新書」はわが国に氾濫していた。そのなかで、影響がいちばん強かったのは康有為や梁啓超の著作だった。民権や自由について議論し、事実上、西洋思想の神髄に迫ったものであった。潘周棹はタン・チョン・ホエ(Than-Trong-Hue)やダオ・グエン・フォ(Dao-Nguyen-Pho)(二人ともホエ市の著名な学者)からこれらの著作をよく借りて読んでいた。こうした書物に魅せられて、彼は寝食を忘れていた。この時期に、彼の思想は完全に変化し、生き返ってきた。」¹¹⁾ と語っている。

潘佩珠や潘周棹は、のち政治活動をするために海外に出たが、海外でも「外国語」としては漢文しか堪能でない二人は、相変わらず「新書」を愛読し、引き続きその影響を受けていた。潘佩珠は自伝のなかで、1905年来日したが、あまりに東遊運動の活動に捉われて、日本語を習得するゆとりがなかったと回想している。それ故、潘がもっている日本や西洋に関する知識の大部分は、梁啓超等が日本で発行した『清議報』や『新民叢報』から吸収されたといえよう。例えば、イタリアの愛国的革命家マッツィニー(Giuseppe Mazzini、1805—72年)の名は潘の著作のなかに頻繁にふれられているが、彼がマッツィニーの生涯について知るようになったのは、梁啓超の著作を通してであった。

潘佩珠は自伝にこのように記している。すなわち、「私が梁任公(梁啓超)を訪ねたとき、公は『意大利建国三傑伝』を執筆していたおり、原稿をみせてくれた。私はマッツィニーを慕うようになった。この伝記のなかの〈教育と暴動は平行に行なわれるべし〉ということばに特に心酔させられた。」¹²⁾

やや余談だが、梁啓超の『意大利建国三傑伝』は、明治時代中期からずっとオピニオン・リーダーの一人として健筆を振っていた徳富蘇峰の著作からヒントを得て書かれたと思われる。梁は明治時代の思想界、言論界、文学界の様々な人から影響を受けたといわれているが、蘇峰もそのなかの一人であった。

潘周棹の場合は、『清議報』に連載された梁啓超による漢訳の『佳人之奇遇』を読んで、つよく感銘を受けた。周知のように、『佳人之奇遇』は東海散士(本名柴四郎)によって1885—97年に書かれた。1885年当時、東アジア諸国は植民地化の危機にさらされた重大な曲角にあった。日本の運命を世界の大勢のなかでとらえるこの政治小説は、日本人読者のみならず、梁啓超や潘周棹のような、他のアジア人にもたいへんな関心をもって読まれたのは容易にわかることである。そこで、潘周棹はベトナム人読者にも自由と独立の精神を植えつけたいと考え、彼がフランスに滞在していた間(1911—25年)、かなりの時間やエネルギーを費やして、ローマ字のクォク・グウで詩訳を試みた。潘周棹の『佳人之奇遇』の重訳は、梁啓超の訳本と同様、未完ではあるが、

7800行にも及び、ベトナムのいちばん代表的な文学作品の長篇韻文詩物語『金雲翹』(Kim-Van-Kieu)の二倍以上の長さがある。潘周棹の訳稿は1926年に『Giai-nhan ky-ngo』の題で出版された頃、多くの人に潘周棹の原作だと思われ、一時は『金雲翹』に代わって、ベトナム文学の代表作にすべきだという声もあがったほどだった。1910年代ヨーロッパで活動していたグエン・アイ・コク(Nguyen-Ai-Quoc 阮愛国、のちホー・チ・ミン)も、このクォク・グウ訳の『佳人之奇遇』を愛読したようである。¹³⁾ 第二次世界大戦直後、ベトナム民主共和国が独立したとき、ホー・チ・ミンは、アメリカ合衆国の『独立宣言』を引用してベトナムの独立を宣言し、また、その後、「独立と自由ほど尊いものはない」を合いことばとしてしばしば用いたことは、よく知られている。しかし、「独立」と「自由」が明治期に造られた和製漢語であり、「独立」は doc-lap として、「自由」は tu-do として、ベトナム語になった経緯については、20世紀初頭における日本-中国-ベトナム間の知識やことばの交流の歴史を知らなければ、気づかないことである。

「新書」は、20世紀初頭に活動していた潘佩珠、潘周棹や同年代のインテリにとってだけではなく、1920年代に青春期を迎える、ベトナムでの漢字教育を習得した最後の年代、すなわちダオ・ズイ・アイン(Dao-Duy-Anh、1904-88年)、ダン・タイ・マイ(Dang-Thai-Mai、1902-84年)、チャン・フィ・リエウ(Tran-Huy-Lieu、1901-69年)などにも深い影響を及ぼした。この三人は、第二次世界大戦後、ベトナムの思想界や文芸界で活躍し、ここ10年、彼らの回想記が出版されている。

例えば、ダオ・ズイ・アイン氏は、自伝である『Nho nghi chieu hom』(たそがれの回想録)のなかにダナン市に滞在した頃、「ある人がもっていた潘周棹が翻訳した『佳人之奇遇』の原稿を通じて、エジプトの革命の歴史……についてはじめて知るようになった」。ダナンよりずっと南に下った、ファン・ティエト市で彼はさらに多くの「新書」に出会った。「この地方の維新会の元メンバーから中国の「新書」ばかりの一箱を寄贈された。『清議報』や『新民叢報』の一揃いずつの他に、康有為、梁啓超、嚴復、中国語訳のモンテスキューの『万法精理』、日本語から翻訳された地理学、歴史学、科学の書籍がたくさんあった」¹⁴⁾と追憶している。

ダン・タイ・マイ氏の場合についても、彼の研究者は、「ダン・タイ・マイ氏にとって、自家蔵書のなかで、もっとも魅力的で、新鮮なのは中国の「新書」であった。……その頃(1910年代)、彼は飲水室主人(梁啓超)の著作にどんなに夢中になっていたか」¹⁵⁾と。

ミリタントなマルクス主義的歴史学者と知られているチャン・フィ・リエウ氏の思想形成期における「新書」の感化もやはり強かった。1950年に書かれた論文「梁啓超と私の思想形成」のなかで、チャン氏は率直に語っている。「思想形成の過程において、私はたいへん早い時期に梁啓超に出会い、そして、きわめて長い期間にわたって、梁の影響を受けた。事実、20世紀初頭から第一次世界大戦まで、ベトナムの進歩的なインテリのなかで、誰ひとりとして梁啓超の影響を受けていない者がいたのだろうか」。ここで注目に値することは、氏が1927年にサイゴンで創立した「Chuong-hoc Thu-xa」(勉学書社)は梁啓超の勉学会を模倣し、書社が出版した書物は、「大概、飲水室主人の著作からヒントを得たものだった」という。驚くことは、このチャン氏も語っているように、梁啓超の著作が世に出てからすでに、約30年の歳月が経っているにもかかわらず、勉学書社が発行した書物は1920年代後半のベトナム人読者層に熱狂的に歓迎されたことである。¹⁶⁾

和製漢語のベトナム語化

これまでみてきたように、和製漢語のベトナム語への転用過程は二つの段階からなっている。すなわち、明治期の日本書から中国語の「新書」へ、そして、「新書」からベトナム語のクォク・グゥへ、である。中国語に借用された和製漢語がベトナム語として浸透するには、まず漢語からクォク・グゥに書き直されなければならない。この作業に携わった人々は、当然ながら、漢語にもクォク・グゥにも精通していなければならなかった。時間にして、和製漢語のクォク・グゥへの転用過程は約40年間かかっている。東遊運動がはじまった1905年から、『Tieng dan』（民声）、『Tri-tan』（知新）、『Thanh-nghi』（清議、おそらくこれも梁啓超の『清議報』にちなんで名づけられただろう）などの有力雑誌が廃刊した1945年頃まで続いた。

ベトナムでクォク・グゥで表わされた和製漢語や新知識をはじめて広く普及させたのは、ハノイに開かれた Dong-kinh Nghia-thuc（東京義塾）であった。東京義塾の「義塾」というのは福沢諭吉が創った慶応義塾に由来し、「東京」は、日本の東京であると同時に、ハノイの旧名でもあった。学校の活動期間はごく短かったが（1907年3月から12月まで）、この学校が発行した教科書、小雑誌、潘佩珠や潘周棹などの著作の普及が新語彙や近代文明の知識を民衆の間に広めた。20世紀初頭のベトナム語の変化について研究しているマイ・ゴク・リエウ（Mai-Ngoc-Lieu）氏は、「東京義塾運動がベトナム語に及ぼした影響というのは、梁啓超や康有為の改革派が著述した新書から、政治、社会、文化、思想などの新漢越の語彙を導入したことである」¹⁷⁾と述べている。しかし、このマイ氏でさえ、普通のベトナム人と同様、「新漢越の語彙」なるものの一部は、和製漢語であったことに気が付かなかったようである。

現代ベトナム語に、中国語の「新書」を中継して導入された和製漢語の一部を、人文科学、社会科学、及び科学技術の各分野別に例を挙げると別表のようになる。

ベトナム語に吸収された和製漢語の殆どは日本語におけるもとの意味で使われているが、数多くはないにせよ、例外もある。例えば、日本語の「弁護士」は、中国語で「律師」といい、ベトナム語も中国に倣い、「luat-su」である。

最近、日本の漫画『ドラえもん』やテレビの『おしん』などがベトナムで人気を博しているが、これら娯楽ものの伝播も直接日本からではなく、やはり中国を経由してベトナムに入ってきているのである。

漢字文化圏と現在のベトナム

近代の思想やことばが、20世紀初頭においてどのような背景で日本から中国の「新書」を経てベトナムに伝播されたかについて再構築してみた。結びにかえて、いわゆる漢字文化圏の国々と現在のベトナムについて、私見を述べたい。

1960年前後、欧米では、漢字、または儒教文化は「近代化」をはばむものとして解釈される傾向があった。ベトナムでも、東京義塾運動が盛んな1900年代の後半から、漢字廃論が訴えられた。例えば、当時の啓蒙的雑誌である『Dong-co Tung-bao』のなかに、次のような意見がある。「漢字は習得するのに余りにも多くの時間やエネルギーが必要なので、文明への障壁である。漢字を学んだ者は日常のことを一切忘れて、現実からかけはなれた遠いむかしのことに夢中になるばか

りである。』¹⁸⁾ 潘周焯も、「不廢漢字、不足以救南国」（漢字を廃止せねば、ベトナムを救うことができない）と似かよった意見を説いた。これらの主張はいかなる歴史的背景のなかで理解したらいいのだろうか。

ベトナムでは、中国式の科挙制度が八百余年も行なわれていた。官吏登用試験としての科挙を受けるためには、古い中国の經典、詩文などを暗記しなければならなかった。そのために、受験生が知らぬ間に懐古的思考をもつようになって、現実への対応に鋭敏でなくなりがちであった。ベトナムでの漢字習得の目的は、たいてい科挙試験の合格をめざすためのものだった。つまり、上に引用された漢字廃止論の主張は、つまるところ漢字の使用そのものを反対したのではなく、科挙制度を批判したと解すべきなのである。科挙制度が長らく漢字を習得させる理由になっていたので、1919年に科挙が廃止された後、漢字や漢文が次々に学校の一般カリキュラムからはずされたのである。

1970年代以後、日本のみならず、韓国、台湾、香港、シンガポールなどの驚異的な経済発展によって、世界経済の重点が東アジア-太平洋地域に移っている。これらの国がもっている主なる文化的共通性はいうまでもなく、儒教文化と漢字文化である。漢字文化に関しては、概念表示に強い漢字、漢語の利点が評価されるようになった。

漢字使用の歴史をもつ東アジア諸国のなかで、冒頭で述べたように、ベトナムだけがローマ字化をとりいれ、共通の伝統からの離脱を試みた。現在ベトナムで採用しているローマ字で表わしたアルファベットのクォク・グゥは、便利な表記法だが、ベトナム語のなかの漢語（「漢越の語彙」ともいう）は、日本語や韓国語のなかの漢字・漢語の役割と同様、たいへん重要な役目を果たしている。表現を厳密に、あるいは専門的に、あるいは抽象的にしたければ漢越の語彙を頻繁に使わなければならないのである。20世紀初頭には、漢語に堪能なベトナム人が多くいたため、中国の「新書」に吸収された、知らずにだが、和製漢語などの新語も紹介し、ベトナム語をより豊かにした。

ベトナムにおける初期の西洋思想の受容は、直接、西洋諸国からではなく、むしろ西洋から日本へ、日本から中国へ、そして中国からベトナムへ、という遠回りであった。その意味で、次のゲン・バン・スアン氏による生き生きした観察はまとを得ているであろう（和製漢語には気がつかなかったようだが）。「西洋文化はサイゴンやマルセーユからの直輸入はできない。いったん上海に入って、中国の文人によって読まれ、吟味され、そして、漢語に書き直されてから、帆船の他の中国の貨物と一緒にベトナムに輸入されなければならなかったのである」。¹⁹⁾

現在、東アジア諸国は飛躍的経済成長をなしとげているが、ベトナムでは、長年の時代錯誤的政策によって国民生活が窮地に迫いつめられていた。1986年からはじまったドイモイ（刷新）の開放政策で活力が徐々に取り戻されているものの、没イデオロギー後のベトナムは今後の歩むべき道を模索しているようである。そのためなのか、近年、ベトナムでは、1975年後姿を消していた儒教（Nho-giao）関係の書物がハノイやホー・チ・ミン市の本屋の棚に目立つようになっていく。

かつてベトナムも長く漢字文化圏の一員であったと考えれば、最近のベトナムで東アジア文化のブームがよみがえってきたことは自然であろう。20世紀初頭に、近代のことばや思想の伝播を通じてベトナムは日本や中国と忘れざる文化交流をもっていたと同じように、現在のベトナムも、

他の東アジア諸国から学ばなければならない体験がたくさんあるはずである。その出発の第一歩として、ベトナムは自己の過去の文化遺産を否定せずに、直視すべきだと思う。例えば、ベトナムの小学校、中学校、高等学校に教養としての漢字教育を週一、二時間カリキュラムに加え、現在のベトナムと東アジアの共通する伝統文化との断絶をうめていく。それによって、ベトナム人は自分たちの文化や歴史の遺産（欠陥をも含めて）をより身近に認知でき、東アジア諸隣国とより積極的、より意味のある交流がもてるであろう。

〔注釈〕

- 1) 実藤恵秀『中国留学生史談』、第一書房、1981年、9ページより引用。
- 2) Chen Sheng Bao, "Chinese Borrowing from the Japanese Language", *The Japanese Foundation Newsletter*, vol. XV, nos. 5-6, May 198.
- 3) 実藤恵秀『中国人 日本留学史』、くろしお出版、1981年、29ページ。
- 4) 同前、随所。Philip Huang, *Liang Ch'ì-ch'ao and Modern Chinese Liberalism* (Seattle: University of Washington Press, 1972), p. 42 も参照。
- 5) Chen Sheng Bao、前掲書。
- 6) Dao Duy Anh, *Nho nghi chieu hom* (Thanh pho Ho Chi Minh: Tre, 1989), p. 70.
- 7) Nguyen Van Xuan, *Phong trao Duy tan* (Saigon: La Boi, 1970), p. 41.
- 8) Dang Thai Mai, *Hoi ky* (Ha Noi: Tac pham moi, 1985), p. 64.
- 9) Dang Thai Mai、前掲書、64-65ページ。
- 10) *Phan Boi Chau nien bieu* in Chuong Thau, ed. *Phan Boi Chau toan tap*, vol. 6 (Hue: Thuan-hoa, 1990), p. 59.
- 11) Minh-Vien Huynh Thuc Khang, *Phan-Tay-Ho Tien-sinh lich-su* (Hue: Anh Minh, 1959), p. 14.
- 12) *Phan Boi Chau nien bieu*, loc. cit., p. 120.
- 13) 故ハノイ大学文学教授のフィン・リー氏によると、1913年の潘周棹宛ての手紙のなかで、阮愛国（当時使っていた名前は Nguyen-Tat-Thanh 阮必成）はつぎのようにかいている。「新たな章の翻訳が終わり次第、私に送ってくださいますか」。なお、潘周棹の著作のなかで、「章」で構成されているものは『佳人之奇遇』だけである。Huynh Ly, *Tho van Phan Chau Trinh* (Ha Noi: Van hoc, 1983), p. 157.
- 14) Dao Duy Anh、前掲書、15ページ。
- 15) Phan Cu De, "Loi gioi thieu", in *Dang Thai Mai — Tac pham* (Ha Noi: Van hoc, 1978), p. 6.
- 16) Vien Su Hoc, *Hoi ky Tran Huy Lieu* (Ha Noi: Khoa hoc Xa hoi, 1991), p. 30.
- 17) Mai Ngoc Lieu, "Tieng Viet trong 25 nam dau the ky XX", in Nguyen Van Trung, *Chu van quoc ngu* (Saigon: Nam Son, 1975), p. 166.
- 18) *Dang-co Tung-bao*, March 28, 1907.
- 19) Nguyen Van Xuan、前掲書、96ページ。

ベトナム語に借用された和製漢語の例

(1) 人文科学・社会科学の語彙

triết học	哲学	xã hội	社会
văn học	文学	kinh tế	経済
nghệ thuật	芸術	chính trị	政治
giáo dục	教育	tự do	自由
lý tính	理性	hành chính	行政
tượng trưng	象徴	quốc tế công pháp	国際公法
khách quan	客観	xí nghiệp	企業
chủ quan	主観	tư bản	資本
biện chứng pháp	弁証法	quyền lợi	権利
khái niệm	概念	cách mạng	革命
đại biểu	代表	trường hợp	場合
đại lý	代理	truyền bá	伝播
đàm phán	談判	phân phối	分配
độc chiếm	独占	biểu hiện	表現
độc tài	独裁	quang trường	広場
đoạn giao	断行	ngẫu nhiên	偶然
động viên	動員	phản ánh	反映
phong kiến	封建	ngành vụ	業務
phương thức	方式	bất động sản	不動産
bi quan	悲観	dẫn độ	引渡
khách quan	客観	tất yếu	必然
diễn thuyết	演説	hiến pháp	憲法

(2) 科学技術の語彙

khoa học	科学	kiến trúc	建築
kỹ thuật	技術	cơ giới	機械
vật lý học	物理学	cao áp	高压
hoá học	化学	giải phẫu	解剖
y học	医学	ôn độ	温度
điện thoại	電話	miễn trừ	免除
quan sát	觀察	quang tuyến	光線
hiện tượng	現象	cơ thể	固体
phóng xạ	放射	vô cơ	無機
số học	数学	hữu cơ	有機
phân tử	分子	phản ứng	反応
tế bào	細胞	sinh vật học	生物学
tín hiệu	信号	tác dụng	作用
điện tín	電信	nguyên lý	原理
động mạch	動脈	kỹ sư	技師
công nghiệp	工業	lượng tử	量子
tĩnh lực	靜力	sinh lý	生理
chu kỳ	周期	thí nghiệm	試驗
chất lượng	質量	thành phần	成分
chỉ số	指数	bệnh trạng	病状
số lượng	数量	điều chế	調製
tĩnh mạch	靜脈	vi phân	微分
âm cực	陰極	tích phân	積分
dương cực	陽極	bệnh lý học	病理学
nguyên tử	原子	hiệu suất	効率
nguyên tố	元素	điện lực	電力
hàn đới	寒帶	trực lưu	直流
nhật đới	熱帶	giao lưu	交流